

Alex Haley の “ROOTS” を読んで

浜 口 み づ ら

長い夏の暑気よけと、とかくだらけ勝ちな休み中の生活に、ちょっとした支柱を立てるつもりで、気軽にとりあげた一冊の本であったが、近頃これほど興味深く読めた小説はない。今年の春頃からわが国でも話題にのぼり、著者とのインタビューがテレビで放映されたりもした。本国アメリカでは、盗作の告発があったり、「虚構」と「事実」でむづかしい論争があったりしたが、結局、権威ある全米優良図書委員会は、「歴史や他の分野を乗り越えた極めて文学的な価値を持っている」という理由で、特別優良図書賞をこの作品に贈った。「歴史や他の分野を乗り越えた……」とは、事実か虚構かは問題ではないという意味に解釈できるし、「極めて文学的な価値を持つ」とは、humanity の執拗な探求がこの作品のメインテーマであるということだと、読み終えたいま、わたしは考えている。著者自身もいっているように、この作品は fact (事実) と fiction (虚構) を交えた faction なのである。

荒筋は、語り手であるアメリカの黒人が、家族の言い伝えを手がかりに、七代前の先祖 Kunta Kinte が、1767年9月末、英国船 Lord Ligonier 号で Maryland の Annapolis に拉致され、850ドルで奴隷に売られたことを、役所の記録によりつきとめ、さらにアフリカの生地をもとめて探検し、その出生地における伝説記録と照合する過程の物語りである。しかし、大部分は、アメリカの歴史とともに歩んだ七代にわたる黒人家族の克明な日常生活描写である。四代目までは苛酷な抑圧のもとでの奴隷生活、それ以降は徐々に自由を獲得してゆく闘いの歴史である。

さてそこで、著者がこの作品を通じて、わたしたちに提起している humanity に関連して、極めて主観的に述べてみることにする。

1) まず、物語のはじめの部分ではっと胸をつかれたのは、アフリカにおける赤ん坊の命名に関してである。

Omoro then walked out before all of the assembled people of the village. Moving to his wife's side, he lifted up the infant and, as all watched, whispered three times into his son's ear the name he had chosen for him. It was the first time the name had ever been spoken as this child's name, for Omoro's people felt that each human being should be the first to know who he was. (P. 3)

Omoro は先に挙げた Kunta Kinte の父親である。誰よりもまず最初に本人が自分の名前を知るべきであるという考えに基づく生後8日目の厳粛な命名の儀式が目に見えようような気がする。

父親が熟考し、心にきめた名前を赤ん坊の耳に三度ささやきかけ、それから人びとにそれを披露する。人間は生れた瞬間から一個の人格として尊重されなければならないというのは、文明社会の産物ではなく、外界の如何にかかわらず、人間の心の奥底から湧き出る原初的な希求なのだと思います。

このようにして名付けられた名前は個人の誇りであり、誰もこれを犯すことはできない。ところがアメリカで農場に売られた Kunta は、本人の意志など無視され、便宜的に Toby と呼ばれることになる。新しい名前を告げられたとき、英語のわからない Kunta ではあったが、本能的に事態を察知し、激しい怒りに燃える。

When Kunta continued to stare at him dumbly, the black one began jabbing at his own chest. "Me Samson!" he exclaimed. "Samson!" He moved his jabbing finger again to Kunta. "You To-by! Toby. Massa say you name Toby!"

When what he meant began to sink in, it took all of Kunta's self-control to grip his flooding rage without any facial sign of the slightest understanding. He wanted to shout "I am Kunta Kinte, first son of Omoro, who is

Alex Haley の “ROOTS” を読んで

the son of the holy man Kairaba Kunta Kinte!” (P. 214)

Kunta の悲しみと怒りがわたしの心にも透ってくる。人間、名前を呼び間違えられると心地よいものではない。ましてや、勝手な名前と呼ばれたりしたら、どんなに傷けられることであろう。わたしは次のようなことを思い出す。まだ小学生だった頃、隣家へくる女中さんは、人はかわれど「お松とん」だった。子ども心に何か割り切れないものを感じ、ご寮さんが呼ぶのをきくたびに、心にひっかかったものである。わたしの中にも Kunta たちと相通じる humanity を見出し、この作品がいっそう身近かに迫ってくる。さらに、名前は親の願いがこめられたものであることを、胸の痛む思いで読んだ箇所がある。逃れようのない奴隷生活の中で、Kunta は年上の Bell と結婚し、娘が生れるのだが、Kunta は悲しいまでの思いをこめて命名し、妻にもかくれてひそかに、アフリカ流の命名の儀式を行なうのである。

When Kunta returned with the baby to the cabin, Bell all but snatched her away, her face tight with fear and resentment as she opened the blanket and examined her from head to toe, not knowing what she was looking for and hoping she wouldn't find it. Satisfied that he hadn't done anything unspeakable—at least nothing that showed—she put the baby to bed, came back into the front room, sat down in the chair across from him, folded her hands carefully in her lap, and asked,

“Alright, lemme have it.”

“Have what?”

“De name, African, what you call her?”

“Kizzy,”

“Kizzy! Ain' nobody never heared no name like dat!”

Kunta explained that in Mandinka “Kizzy” meant “you sit down,” or “you stay put,” which, in turn, meant that Bell's previous two babies, this child would never get sold away. (P. 344)

彼らにとっていちばんの悲劇は、売られて家族がばらばらになることであ

る。血のつながる、愛しあう者たちが、自分の意志ではなく、無理やりに引き裂かれるとは、実に酷いことである。しかも、それを阻止する術は、“you sit down” という意味の Kizzy という名前をつけるしかない。この場合、名前の荷う比重は非常に大きい。単に可愛いとか、流行だとかとはちがって、本人ならびに周囲の者の運命にもかかわる重大な意味をもつものなのである。本来、名前は大切なものである。「名は体をあらわす」とか、「名をけがす」などのことばにも見られるとおり、わが国にも名を重んじる思想は古くからあった。しかし、最近は何と名が軽んぜられていることか！ その最たるものは、「人名漢字」の制定である。親の願いを無視し、大きさにいえば、人間の運命までも左右する名前に制限を加えるなどは、学者や役人の傲慢というほかない。わたしのこの憤慨に Kunta なら同感してくれると信じる。

人間尊重、人間の尊厳は、200年前のアフリカの奥地と今日の文明国とで、いずれによりかたく守られているのか、考えこまざるを得ない。親の願いが素直に子の名前となり、子どもは親がつけた名前に誇りをもって生きてこそ、よき社会が形成されるのではないか、developing が developed に移行する過程で失われる humanity を、できる限り喪失させない努力がわたしたちに必要なることを痛感させられる。

2) もう一点わたしの心を揺り動かしたものは、人間の値段、価値ということである。奴隷制度という状況のもとで人間が人間を売買するということは、現在からみると、極めて非人間的なことである。人間、自由でありたいというのは、如何なる時代、状況のもとでも最高の願いである。このことを三代目 Chicken George は先輩の黒人奴隷 Uncle Mingo から教えられ、彼の一生はそれを照準に進行するのである。

“I specks. ‘cause I know he got to be freelin’ pretty good ‘bout dat wing-strengthenin’ idea of your’n what done put good money in his pocket. Thing is if he do, is you gwine have sense enough to save up what you git!”

Alex Haley の “ROOTS” を読んで

“Sho’ do dat! I sho’ wou[d]!”

“I’se even heard o’ niggers winnin’ an’ savin’ enough from hackfightin’ to buy deyselves free from dey massas.”

“Buy me an’ my mammy both!” (P, 486)

“to buy themselves free”ということばがわたしの胸に焼きついてはなれない。闘雞の訓練師として腕をあげ、主人を大いに儲けさし、彼にも貯えができたとき、運命は下り坂をたどりはじめる。次の賭けこそ、次の賭けこそと希望を托して、貯えは少しずつ減少する。ここで Chicken George と妻 Matilda が自分たち夫婦と 8 人の子どもたちの値踏みをする場面がある。何ともいえない印象的なシーンである。

Watching his expression change, she sensed that she had never observed his grow more serious in all their twelve years together. “Off down yonder by myself so much,” he said finally, “I been thinkin’ ‘bout whole heap o’ things.” He paused. She thought he seemed almost embarrassed by whatever he was about to say. “One thing I been thinkin’, if’n us could save ‘nough dese nex’ comin’ years, maybe us could buy ourselves free,” (P. 539)

Chicken George はこれまで金を貯える目的を、妻にも明かにしていなかった。誰しも、胸の奥深くに抱く希望は、そうそう人に語れるものではない。

奴隷の値段は労働力に換算してつけられる。Matilda は800ドル、子どもたちは半人前で各300ドルと彼らは評価する。さて、Chicken George はいくらか？ 本人にもわからない。“What you think I’se worth?” と彼は妻に聞いている。

“If I’doknewed, I’dotried to buy you for massa myself.” They both laughed. (P. 540)

彼らのこの乾いた笑い声に、わたしはほっと救われる気持がした。結局、闘

雞の飼育という特技をもつ Chicken George は1000ドルの値段がつくだろうと二人の意見は一致する。

最初この部分を読んだとき、自分を買取るために酷使され、それに耐えている奴隷の悲惨さに名状しがたい悲哀、同情を感じたものである。しかし、次の瞬間、ちょっと視点をずらせば、自分の姿と何ら変わらないのではないかと気付いた。自分を買戻すことは、何も奴隷に限った問題ではない。誰の所有物でもない、現代人のわたしたちも、自分を買戻し、自由になろうと日々あがいている。束縛しているのは、奴隷制度ではない。自分たちが生み出した文明や、金銭や、野心ではなかろうか。自分の値踏みができないことも、手痛い批判として胸に突きささった。自由を求める心がどんなに強くとも、それを手にするための適確な手段を見出し得なければ、いかなる努力も徒労にしかすぎない。

“What do you think I'm worth?” という問いかけは、黒人、白人、黄色人の別なく、これからも永遠に問いつづけられることばではないだろうか。

時代をへだて、生活の場所を異にする作品中の人物に、このような共感を覚え、七百頁近い長篇を、あっという間に読ませてしまう秘密は一体何にあるのだろうか、それは、著者が単なる自己の identity (存在証明) への関心から遠く家系をたどり、記録文学としてこれを書いたのではなく、普遍的で、それでいて根深く人間の心の襞にたたみこまれている humanity を掘り起し、提示しているからにほかならない。文学の不変の課題を、個人的な怨念を乗り越えて、追求するところがこの作品の魅力だと、読み終えてひと月たったいまも、感激の余韻をあたためている。

最後に、扉の dedication を紹介してペンをおく。

It wasn't planned
that Roots' researching and writing
finally would take twelve years.
Just by chance it is being published.

Alex Haley の “ROOTS” を読んで
in the Bicentennial Year of the United States.
So I dedicate Roots as a birthday offering to my country
within which most of Roots happened.

(Sept. 6, 1977)